

自己開示に及ぼす親密さとコミュニケーションメディアの影響

児玉真樹子・三根拓己・高本雪子・深田博己

The effect of intimacy and communication media on self-disclosure

Makiko Kodama, Hiroki Mine, Yukiko Takamoto, and Hiromi Fukada

本研究は、自己開示に及ぼす相手との親密度とコミュニケーションメディアの影響を検討することを目的とした。コミュニケーションメディアとしては、対面、携帯電話、携帯メールを設定し、相手との親密度は高、低の2条件を設定した。コミュニケーションメディアを被験者内要因、親密度を被験者間要因の混合計画とし、大学生(高親密度条件が39名、低親密度条件が45名)を対象に実験を行った。その際、先行研究を基に、次の3つの仮説を立てた。まず仮説1として、コミュニケーションメディアの種類を問わず、高親密度条件のほうが低親密度条件に比べて、自己開示量が多くなると推測した。仮説2として、高親密度条件では、対面条件において自己開示が最も多くなると推測した。仮説3として、低親密度条件では、携帯メール条件において自己開示が最も多くなると推測した。実験の結果、仮説1、仮説2は支持された。しかし、低親密度条件では、高親密度条件と同様、対面条件で自己開示量が最も多くなり、仮説3は支持されなかった。

キーワード：コミュニケーションメディア、親密度、自己開示、対人コミュニケーション評価

問 題

近年日本では、インターネットや携帯電話など、電子的なメディアを用いたコミュニケーションが普及してきている。特に普及が顕著なものが携帯電話である。総務省(2004)の発表によると、2004年9月末での携帯電話もしくはPHSの加入件数は約8,864万件にのぼっている。また、博報堂(2004)によると、大学生では、96.3%が携帯電話もしくはPHSを所有しており、所有者の34.9%が携帯電話もしくはPHSを用いてメールを1日に10件以上発信している。このことから、携帯電話(PHS含む)を用いた電子メール(以下、携帯メール)によるコミュニケーションが、大学生の世代では主たるコミュニケーションの1つとして扱われていることがうかがえる。

メディア別、親密度別にみたコミュニケーションに対する評価

都築・木村(2000)は、携帯電話を含めた電子的なメディアによるコミュニケーションには、対

面によるコミュニケーションとは異なる長所、短所があると考え、各メディアによるコミュニケーションの心理的特性を明らかにすることを目的として実験を行った。メディアとしては、対面、携帯電話の電話機能（以下、携帯電話）、携帯メール、パソコンの電子メール（以下、電子メール）の4つを設定した。また、心理的特性に関しては、目的を持った情報伝達機能を持つことを表す「目的性」、話しやすさなどの感情的な評価を表す「情緒性」、緊張感や心理的負担などを表す「対人圧力」の3つの側面を設定し、質問項目を作成した。被験者には、各メディアを利用したコミュニケーションに関して、3つの心理的特性を評価させた。心理的特性について因子分析したところ、情報伝達、親和感情、対人緊張の3因子が抽出され、それぞれが当初想定していた、目的性、情緒性、対人圧力に該当した。また、分散分析の結果、情報伝達因子については、得点が高い順に携帯電話、対面、携帯メール、電子メールとなり、携帯電話と対面との間以外の全ての条件間で有意差がみられた。親和感情因子については、得点が高い順に対面、携帯メール、携帯電話、電子メールとなり、携帯メールと携帯電話の間以外の全ての条件間で有意差が見られた。対人緊張因子については、得点が高い順に対面、携帯電話、電子メール、携帯メールとなり、携帯電話と電子メールの間以外の全ての条件間で有意差が見られた。

岡本（2004）は、都筑・木村（2000）の実験に相手との親密度の要因を組み込み、相手との親密度を被験者間要因とし、コミュニケーションメディア（岡本（2004）ではコミュニケーション形態と呼んでいる）を被験者内要因とした2要因の混合計画の実験を行った。なお、相手との親密度に関しては低親密度条件（既知であるが親しくない人）と高親密度条件（既知で親しい人）の2条件を設定し、コミュニケーションメディアに関しては、携帯電話、携帯メール、対面の3条件を設定した。従属変数としては、対人コミュニケーション評価（都筑・木村（2000）におけるメディアコミュニケーションの心理的特性を指す）を設定した。なお、対人コミュニケーション評価は、因子分析の結果、都筑・木村（2000）と同様に、対人緊張、親和感情、情報伝達の3つの因子にまとまった。実験の結果、コミュニケーションメディアおよび相手との親密度が、対人コミュニケーション評価の3つの因子に異なる影響を及ぼすことが明らかとなった。対人緊張因子について、高親密度条件では携帯電話条件が最も高く、次いで携帯メールが高く、対面条件で最も低く評価されていたが、低親密度条件では、携帯メール条件が他の2条件と比べて低く評価されていた。親和感情因子に関して、高親密度条件では、対面条件が他の2条件よりも高く評価され、低親密度条件では携帯メール条件が他の2条件よりも高く評価された。情報伝達因子について、高親密度条件では携帯電話条件が対面より有意に高く評価され、低親密度条件では携帯メールで最も高く、次いで携帯電話が高く、対面で最も低く評価された。

岡本（2004）の研究により、対人コミュニケーション評価については、コミュニケーションメディアや相手との親密度によって差がみられることが明らかとなった。しかし、この研究では評価という主観的な要因のみを扱っており、実際のコミュニケーション行動については扱われていない。よって本研究では、岡本（2004）の研究にコミュニケーション行動を組み込むことで、コミュニケーションメディアに関する研究を発展させていきたい。

自己開示行動とコミュニケーションメディアおよび親密度との関係

実際のコミュニケーション行動として、本研究では自己開示行動を扱うこととする。自己開示とは、未知既知を問わず、特定の他者に対し、意図的に自分に関する情報を言語的に伝達する行為のことである(藤原, 1995)。自己開示に関する研究には、コミュニケーションメディアによる自己開示量の違いを検討した Joinson (2001) や、親密度別に自己開示量の違いをみた丹野・下斗米・松井 (2004) のような研究は見られるものの、コミュニケーションメディアと親密度を同時に扱った研究は見られない。岡本 (2004) で従属変数として扱われた対人コミュニケーション評価の3因子のうち、話しやすさなどを表す「親和感情」の評価が高く、緊張感などを表す「対人緊張」の評価が低いコミュニケーションメディアでは、自己開示量が多くなると考えられる。岡本 (2004) では親密度により各コミュニケーションメディアに対する評価が異なることが明らかとなっているため、自己開示についてもコミュニケーションメディアと親密度には交互作用が見られる可能性もあるにも関わらず、これに関しては検証されていない。

以上より、自己開示行動に及ぼすコミュニケーションメディアおよび相手との親密度の影響を検討することを本研究の目的とする。なお、岡本 (2004) に合わせ、コミュニケーションメディアは、対面、携帯電話、携帯メールの3条件を設定し、相手との親密度は高親密度と低親密度の2条件を設定する。

丹野ら (2004) の研究では、相手との親密度が高いほうが自己開示量が多かった。この研究ではコミュニケーションメディアを特定していなかったが、本研究で設定した3つのコミュニケーションメディアいずれにおいても、同様の結果が得られると考えられる。そのため、次のような仮説を立てることとする。

仮説1: どのコミュニケーションメディアにおいても、高親密度条件のほうが低親密度条件より自己開示しやすい。

また、岡本 (2004) によると、高親密度条件では対面条件において「親和感情」得点が最も高く、「対人緊張」得点が最も低かったことから、相手との親密度が高い場合は対面条件において最も自己開示しやすいと考えられる。同様に岡本 (2004) では、低親密度条件で携帯メールが最も「親和感情」得点が高く、「対人緊張」得点が最も低かったため、相手との親密度が低い場合は、携帯メール条件において最も自己開示しやすいと考えられる。よって、次の仮説を立てることとする。

仮説2: 高親密度条件では対面条件において最も自己開示しやすい。

仮説3: 低親密度条件では携帯メール条件において最も自己開示しやすい。

方 法

実験計画

質問紙によって、コミュニケーションをする相手との親密度(高, 低, 被験者間要因)と、コミュニケーションメディア(対面, 携帯電話, 携帯メール, 被験者内要因)を操作した, 2×3の混合計画であった。従属変数は, 対人コミュニケーション評価と自己開示とした。

実験手続き

2004年の10月から11月にかけて行った。親密度の条件によって質問紙を別に作成した。高親密度条件の質問紙、低親密度条件の質問紙をそれぞれ約60部ずつ、友人や知人などにランダムに配布し、調査者が被験者から直接回収したり、友人を通じて回収した。

被験者

広島大学の大学生で携帯電話を所有している者120名を被験者とした。97名分回収し、そのうち有効回答は84名分（高親密度条件39名、低親密度条件45名）であった。有効回答者の平均年齢は20.65歳で、男性が29名、女性が55名であった。なお、この有効回答を用いて分析を行った。

質問紙

質問紙のタイトルは「コミュニケーション行動とその評価に関する調査」とした。高親密度条件の質問紙では、コミュニケーションの相手を「同世代のとても親しい友人」とし、低親密度条件の質問紙では相手を「同世代の親しくない人」と指定した。

また対面・携帯電話・携帯メールの評定順序については順序効果を統制するためランダム化した。自己開示と対人コミュニケーション評価の評定順序については、対人コミュニケーション評価から自己開示へ影響があると想定しており、対人コミュニケーション評価について先に回答することによって自己開示についての回答に影響が出ることを避けるため、まず自己開示について評定させた後で対人コミュニケーション評価について評定させるように質問紙を構成した。

自己開示 丹野ら(2004)において自己開示する内容に関する30の質問項目のうち、因子分析で抽出された7つの因子（友人・人格、学業・能力、生活、恋愛、態度、趣味、進路）のそれぞれから各3項目を抽出し、計21項目を自己開示尺度として利用した。具体的な項目はTable 1に示した。それぞれの内容について、どの程度自己開示をしているかを「全く伝えていない」（1点）から「十分に伝えている」（4点）の4段階評定させた。

対人コミュニケーション評価 岡本(2004)における対人コミュニケーション評価項目16項目のうち、因子分析で抽出された対人緊張と親和感情の2因子については因子負荷量の大きいものから3項目ずつと、情報伝達因子については他の因子と因子負荷量の差が.03しかなかった「集中できる」という項目を除いた2項目の計8項目を抽出した。さらに村瀬・井上(2003)で用いられた携帯メールに関する評価項目のうち「メールはいつでも使えて便利である」という項目を基に「いつでも利用できる」という項目を新たに作成し、これを情報伝達因子の項目として追加した全9項目をコミュニケーション評価尺度とした。具体的な項目はTable 1に示した。尺度の各項目に対して「全くあてはまらない」（1点。逆転項目では4点）から「非常にあてはまる」（4点。逆転項目では1点）の4段階で評定させた。

結 果

自己開示と対人コミュニケーション評価の因子構造に関する検討

想定していた因子構造がみられるかを確認するため、自己開示に関する21項目、対人コミュニケーション評価に関する9項目についてそれぞれ因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行っ

Table 1 自己開示および対人コミュニケーション評価の質問項目

変数	因子	No	質問項目
自己開示	友人・人格	自1	自分の性格で他人とは違うと思う部分
		自8	直したいと考えている性格側面
		自15	自分の性格の長所や短所
	学業・能力	自2	特技についての話
		自9	学校の成績
		自16	持っている資格や免許
	生活	自3	親や兄弟と自分の関係
		自10	家庭内での自分の役割
		自17	理想の家庭像
	恋愛	自4	これまでの恋愛体験
		自11	異性関係に関する悩み事
		自18	異性の好み
	態度	自5	社会に対する不満
		自12	社会問題への意見
		自19	道徳やモラルについての考え・態度
	趣味	自6	好きな映画や音楽について
		自13	趣味としている事柄
		自20	休日の過ごし方
	進路	自7	将来への期待や不安
		自14	就きたい職業について
		自21	卒業後の進路に関する計画
対人コミュニケーション評価	対人緊張	評1	緊張する
		評4	疲れる
		評7 ^(注)	気軽である
	親和感情	評2	相手を身近に感じる
		評5	思いやりを表現できる
		評8	個人的な話ができる
	情報伝達	評3	目的がある
		評6	いつでも利用できる
		評9	情報収集に効果的である

注)逆転項目

た。なお、分析対象者である84名分の各コミュニケーションメディア(3条件)の評価結果をすべてあわせて252名分のデータとして分析した。その際、因子数は固有値が1.00以上であることを基準に決定した。また、因子負荷量が.40未満の項目および他の因子との因子負荷量の差が.10未満の項目を削除した。

自己開示に関する因子分析の結果はTable 2に示したとおり、3因子が抽出された。また、因子間相関は第1因子と第2因子の間で.72、第2因子と第3因子の間で.68、第1因子と第3因子との間で.64であった。第1因子には、丹野ら(2004)での恋愛因子の3項目と友人・人格因子の2項目が含まれていることから、「恋愛・性格因子」($\alpha=.92$)と命名した。第2因子には、丹野ら(2004)での態度因子の3項目と生活因子の2項目が含まれており、態度因子は社会への態度を、生活因子は家庭に関するものを扱っているため、「社会・家庭因子」($\alpha=.91$)と命名した。第3因子は丹野ら(2004)で趣味因子として扱われた3項目に「特技についての話」という項目が加わる構成となった。よって「趣味因子」($\alpha=.86$)と命名した。

対人コミュニケーション評価については、当初想定した構造と一致した結果となった。そのため、

Table 2 自己開示に関する因子分析の結果

	I	II	III	共通性
自11 異性関係に関する悩み事	1.04	-.20	-.02	.79
自4 これまでの恋愛体験	.89	-.11	.07	.73
自18 異性の好み	.77	.09	.02	.71
自8 直したいと考えている性格側面	.59	.23	.03	.64
自7 将来への期待や不安	.54	.29	.01	.61
自1 自分の性格で他人とは違うと思う部分	.42	.24	.19	.57
自12 社会問題への意見	-.10	.90	-.03	.66
自19 道徳やモラルについての考え・態度	-.09	.89	.05	.72
自5 社会に対する不満	.06	.74	.00	.61
自16 持っている資格や免許	-.11	.63	.15	.44
自17 理想の家庭像	.38	.60	-.19	.62
自15 自分の性格の長所や短所	.32	.51	.07	.69
自10 家庭内での自分の役割	.28	.47	.06	.55
自13 趣味としている事柄	-.01	.00	.88	.75
自6 好きな映画や音楽について	.15	-.14	.83	.70
自20 休日の過ごし方	-.09	.24	.68	.64
自2 特技についての話	.06	.27	.41	.45
因子寄与	7.69	7.90	6.42	

Table 3 対人コミュニケーション評価に関する因子分析の結果

	I	II	III	共通性
評1 緊張する	.92	.06	.13	.69
評4 疲れる	.78	-.10	.13	.59
評7 気軽である	.50	-.11	-.40	.70
評5 思いやりを表現できる	.20	.79	.12	.55
評2 相手を身近に感じる	-.18	.74	-.08	.67
評8 個人的な話ができる	-.24	.69	-.05	.67
評6 いつでも利用できる	-.21	-.20	.81	.78
評9 情報収集に効果的である	.17	.34	.57	.42
評3 目的がある	.19	.03	.42	.13
因子寄与	2.82	2.56	2.05	

岡本 (2004) の因子名をそのまま利用して、第1因子から順に、「対人緊張因子」($\alpha=.81$)、「親和感情因子」($\alpha=.81$)、情報伝達因子 ($\alpha=.58$) と命名した。また、因子間相関は第1因子と第2因子の間で-.50、第2因子と第3因子の間で.30、第1因子と第3因子との間で-.52であった。

対人コミュニケーション評価の分散分析

親密度 (高親密度条件, 低親密度条件, 被験者間要因) とコミュニケーションメディア (対面, 携帯電話, 携帯メール, 被験者内要因) の2要因分散分析を対人コミュニケーション評価因子別に行った。対人コミュニケーション評価の各因子の得点は、下位項目の得点を合計して項目数で除した平均値とし、分析を行った。親密度別, コミュニケーションメディア別にみた対人コミュニケーション評価の各因子の平均値と標準偏差を Table 4-1 に示す。

対人緊張因子においては、親密度要因, コミュニケーションメディア要因のそれぞれに有意な主効果が認められ (順に, $F(1, 82)=122.81, p<.001$; $F(2, 164)=42.52, p<.001$), 親密度とコミュニケーションメディアの交互作用も有意であった ($F(2, 164)=8.26, p<.001$)。親和感情因子に

においても同様に、親密度要因、コミュニケーションメディア要因のそれぞれに有意な主効果が認められ（順に、 $F(1,82)=86.43, p<.001$ ； $F(2,164)=50.49, p<.001$ ），2 要因の交互作用も有意であった（ $F(2,164)=4.55, p<.05$ ）。情報伝達因子は、親密度要因、コミュニケーションメディア要因のそれぞれに有意な主効果が認められたが（順に、 $F(1,82)=8.07, p<.01$ ； $F(2,164)=22.39, p<.001$ ），親密度とコミュニケーションメディアの2 要因の交互作用は認められなかった。なお、下位検定の結果は Table 4-2 にまとめて示した。

自己開示の分散分析

親密度（高親密度条件，低親密度条件，被験者間要因）とコミュニケーションメディア（対面，携帯電話，携帯メール，被験者内要因）の2 要因分散分析を自己開示の因子別に行った。自己開示の各因子の得点は，下位項目の得点を合計して項目数で除した平均値とし，分析を行った。親密度別，コミュニケーションメディア別にみた自己開示の各因子の平均値と標準偏差を Table 5-1 に示した。

恋愛・性格因子においては，親密度要因，コミュニケーションメディア要因のそれぞれに有意な主効果が認められ（順に， $F(1,82)=93.15, p<.001$ ； $F(2,164)=34.31, p<.001$ ），親密度とコミュニケーションメディアの交互作用も有意であった（ $F(2,164)=7.77, p<.001$ ）。社会・家庭因子

Table 4-1 親密度，コミュニケーションメディア別にみた対人コミュニケーション評価の平均値（SD）

	対人緊張因子		親和感情因子		情報伝達因子	
	高親密	低親密	高親密	低親密	高親密	低親密
対面	1.63 (0.51)	3.13 (0.66)	3.39 (0.53)	2.07 (0.76)	2.50 (0.70)	2.23 (0.53)
携帯電話	2.13 (0.54)	3.14 (0.62)	2.47 (0.77)	1.59 (0.48)	2.66 (0.72)	2.41 (0.69)
携帯メール	1.47 (0.57)	2.37 (0.75)	2.53 (0.85)	1.60 (0.43)	3.11 (0.67)	2.59 (0.73)

Table 4-2 対人コミュニケーション評価の各因子に関する，親密度およびコミュニケーションメディアの各条件間の有意差の有無

因子	要因	有意差の有無			
		低	>	高	
対人緊張	親密度	電話	>	対面	
	メディア	対面	>	メール	
	メディア×親密度	高親密度	電話	>	対面 = メール
		低親密度	対面	=	電話 > メール
メディアの全条件		低	>	高	
親和感情	親密度	対面	>	メール = 電話	
	メディア	対面	>	メール = 電話	
	メディア×親密度	高親密度	対面	>	メール = 電話
		低親密度	対面	>	メール = 電話
メディアの全条件		高	>	低	
情報伝達	親密度	メール	>	電話 > 対面	
	メディア	高	>	低	
メディア×親密度		メール	>	電話 > 対面	

注1) >は有意差あり，=は有意差なしを表す(いずれも有意水準5%)

注2) 多重比較は，Ryan法で行った

注3) メディアはコミュニケーションメディア，メールは携帯メール，電話は携帯電話をさす

においても同様に、親密度要因、コミュニケーションメディア要因のそれぞれに有意な主効果が認められ（順に、 $F(1,82)=28.00, p<.001$ ； $F(2,164)=46.37, p<.001$ ）、2 要因の交互作用も有意であった（ $F(2,164)=9.47, p<.001$ ）。趣味因子は、親密度要因、コミュニケーションメディア要因のそれぞれに有意な主効果が認められたが（順に、 $F(1,82)=27.96, p<.001$ ； $F(2,164)=39.12, p<.001$ ）、親密度とコミュニケーションメディアの 2 要因の交互作用は認められなかった。なお、下位検定の結果は Table 5-2 にまとめて示した。

自己開示の各因子と対人コミュニケーション評価の各因子との間の相関

親密度別、コミュニケーションメディア別に、自己開示の各因子の得点と対人コミュニケーション評価の各因子の得点の相関係数を算出した。その結果、Table 6 のとおりとなった。高親密度条件では、いずれのコミュニケーションメディアにおいても、対人コミュニケーション評価のうちの親和感情因子が、自己開示のうち恋愛・性格因子および社会・家庭因子との間に有意な正の相関を示した。また、対面条件では、対人緊張と恋愛・性格因子および社会・家庭因子との間に有意な負の相関が、携帯電話条件では対人緊張と社会・家庭因子との間に有意な負の相関が、携帯メール条件では情報伝達と恋愛・性格因子および趣味因子との間に有意な正の相関がみられた。一方、低親密度条件では有意な相関は見られなかった。

Table 5-1 親密度、コミュニケーションメディア別にみた自己開示の平均値 (SD)

	恋愛・性格因子		社会・家庭因子		趣味因子	
	高親密	低親密	高親密	低親密	高親密	低親密
対面	2.81 (0.72)	1.56 (0.52)	2.41 (0.80)	1.57 (0.51)	2.88 (0.68)	2.04 (0.64)
携帯電話	2.15 (0.76)	1.27 (0.33)	1.70 (0.67)	1.34 (0.35)	2.22 (0.83)	1.63 (0.50)
携帯メール	2.03 (0.67)	1.31 (0.35)	1.61 (0.59)	1.25 (0.28)	2.22 (0.82)	1.66 (0.55)

Table 5-2 自己開示の各因子に関する、親密度およびコミュニケーションメディアの各条件間の有意差の有無

因子	要因	有意差の有無			
		高	>	低	
恋愛・性格	親密度	高	>	低	
	メディア	対面	>	電話 = メール	
	メディア×親密度	高親密度	対面	>	電話 = メール
		低親密度	対面	>	電話 = メール
	メディアの全条件	高	>	低	
社会・家庭	親密度	高	>	低	
	メディア	対面	>	電話 = メール	
	メディア×親密度	高親密度	対面	>	電話 = メール
		低親密度	対面	>	電話 = メール
	メディアの全条件	高	>	低	
趣味	親密度	高	>	低	
	メディア	対面	>	電話 = メール	
	メディア×親密度				

注1) >は有意差あり、=は有意差なしを表す(いずれも有意水準5%)

注2) 多重比較は、Ryan法で行った

注3) メディアはコミュニケーションメディア、メールは携帯メール、電話は携帯電話をさす

Table 6 自己開示の各因子と対人コミュニケーション評価の各因子との間の相関係数

対人コミュニケーション評価	自己開示	対面			携帯電話			携帯メール			
		恋愛・性格	社会・家庭	趣味	恋愛・性格	社会・家庭	趣味	恋愛・性格	社会・家庭	趣味	
高親密度条件	対面	対人緊張	-.35 *	-.42 **	-.29 †						
		親和感情	.47 **	.51 ***	.31 †						
		情報伝達	.17	.21	.16						
	携帯電話	対人緊張				-.14	-.32 *	-.11			
		親和感情				.42 **	.41 **	.28 †			
		情報伝達				.05	.25	.25			
	携帯メール	対人緊張							-.22	-.08	-.18
		親和感情							.48 **	.47 **	.25
		情報伝達							.37 *	.24	.38 *
低親密度条件	対面	対人緊張	.05	.06	.01						
		親和感情	-.09	-.11	.22						
		情報伝達	-.20	-.11	-.03						
	携帯電話	対人緊張				.08	-.16	.03			
		親和感情				.10	.16	.17			
		情報伝達				.03	.22	.15			
	携帯メール	対人緊張							-.14	.00	-.21
		親和感情							.06	-.02	.03
		情報伝達							.02	-.04	.09

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

考 察

仮説の検証

本研究では、自己開示行動に及ぼすコミュニケーションメディアおよび相手との親密度の影響を検討することを目的としていた。

まず仮説1については、いずれのコミュニケーションメディアにおいても高親密度条件の場合のほうが低親密度条件の場合よりも自己開示の3因子全てで得点が高くなったことより、支持された。

次に、仮説2について検証する。2要因の交互作用が確認された、自己開示の2つの因子(恋愛・性格因子、社会・家庭因子)については、単純主効果の検定の結果、高親密度条件で対面条件が他の2条件より有意に高くなった。交互作用が見られなかった1因子(趣味因子)ではコミュニケーションメディアの主効果が確認されており、対面条件が他の2条件より有意に高かった。これらの結果より、仮説2は支持された。

最後に仮説3について検証する。本研究の結果では、自己開示のすべての因子において、低親密度条件で、高親密度条件と同様、対面条件が他の2つの条件と比べて高くなった。この仮説は、対人コミュニケーション評価の因子のうち、対人緊張が低く、親和感情が高い場合、自己開示されやすいと想定し、立てたものである。しかし、親密度別、コミュニケーションメディア別に、自己開示の各因子の得点と対人コミュニケーション評価の各因子の得点の相関係数を算出したところ、高親密度条件では想定した関係性が確認されたものの、低親密度条件では、自己開示と対人コミュニ

ケーション評価に有意な相関は見られなかった。さらに、岡本(2004)の研究で、低親密度条件においては携帯メール条件で「親和感情」が高く、「対人緊張」が低くなっていたことも、仮説3の根拠となっていた。しかし、このような結果は本研究では確認されなかった。そのため、仮説3が支持されなかったと考えられる。また、低親密度条件の被験者の回答を回収する際、被験者から、「このような相手とは電話やメールはしない」というコメントが比較的多くあった。三宅(2002)によると、学生の携帯メールの主な相手は、あまり会えない友人・よく会う友人で全体の56.3%、兄弟姉妹・親で25.3%、恋人で10.7%を占めていることから、親しくない人と携帯メールのやりとりをすることはあまりないことが推測できる。すなわち、学生は主に親密度の高い人と携帯電話や携帯メールを利用してコミュニケーションしている。そのため、低親密度条件における自己開示の各因子の得点が対面条件において最も高くなったことより、親しくない人とはわざわざ電話やメールを利用してまで自己開示することはないが、対面したときには挨拶や世間話などから話の流れで自己開示をすることがあるのかもしれない。また、対人コミュニケーション評価に関して、低親密度条件の被験者は、実際には携帯電話や携帯メールを使つてのコミュニケーションが無いにもかかわらず、評定していた可能性があり、データの妥当性に疑問が残る。そのため、低親密度条件では岡本(2004)の結果と一致しなかったのかもしれない。

今後の課題

本研究の被験者である大学生は、親密度の低い人と携帯電話や携帯メールを利用してコミュニケーションをあまりとっていないという現状より、低親密度条件について十分検討できなかった。よって、親密度の低い人と携帯電話や携帯メールでコミュニケーションを行う程度の異なる集団を対象にして、この問題を検討する必要があるだろう。

また、本研究で対面と比較をした携帯電話、携帯メール以外に、近年利用率の高いコミュニケーションメディアとしてパソコンが挙げられるが、パソコンによるコミュニケーションと携帯電話によるコミュニケーションには異なる特徴が見られる。例えば、都筑・木村(2000)では、パソコンによるコミュニケーションの1種として電子メールを扱っているが、同様に文字によるコミュニケーションである携帯メールとの間に、メディアコミュニケーションの心理的特性(本研究における対人コミュニケーション評価に該当)の全因子の得点で有意差が見られた。そのため、パソコンによるコミュニケーションも含めて検討することで、各コミュニケーションメディアの特徴が更に明らかになると考えられる。

また、携帯電話を利用したコミュニケーションに関する研究は、その殆どが大学生を対象としたものであり、限定された世代からしかデータが得られていない。すでに携帯電話がほぼ全ての世代に普及していることを考えても、社会人や小・中・高校生を対象とした研究も必要であろう。

引用文献

藤原千秋 1995 自己開示 小川一夫(監修) 改訂新版社会心理学用語辞典 北大路書房 Pp.107.

博報堂 2004 10～30代男女の携帯電話利用状況調査

<http://www.hakuhodo.co.jp/news/pdf/20040319.pdf>

Joinson, A. N. 2001 Self-disclosure in computer-mediated communication : The role of self-awareness and visual anonymity. *European Journal of Social Psychology*, 31, 177-192.

三宅喜美代 2002 ケータイメールを利用する若者の対人関係—本学学生のアンケート調査の分析— 大垣女子短期大学研究紀要, 43, 49-59.

村瀬高敏・井上果子 2003 携帯電話のメール利用とその効果～男女差の検討～ 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要, 3, 99-118.

岡本 香 2004 電子メディア媒介型の対人コミュニケーション評価に関する実証的研究 コミュニケーション形態の違いおよび相手との親密度の違いが電子メディア媒介型の対人コミュニケーション評価に及ぼす影響の検討 第2章第1節 広島大学博士論文(未公刊) Pp.25-48.

総務省 2004 移動電気通信事業加入数の現況

http://www.soumu.go.jp/s-news/2004/041203_4.html (2004年12月3日発表)

丹野宏昭・下斗米 淳・松井 豊 2004 親密化過程と自己開示について—自己開示量・願望・義務の3側面からの検討— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 154-155.

都築誉史・木村泰之 2000 大学生におけるメディア・コミュニケーションに関する心理的特性に関する分析—対面, 携帯電話, 携帯メール, 電子メール条件の比較— 応用社会学研究, 42, 15-24.